

2 試合開始

- まず相手に、次に審判員と読み手に、しっかりと礼をします。
- 〔構え方〕自分の札より手前の畳の上に両手をついて、歌が読まれるのを待ちます。
頭は中心線を越えてはいけません。

- 読み手が読み上げる札を取っていきます。
* 札を取る時は、右か左かどちらか片方の手で、
札を押さえて取ります（払ったり飛ばしたりはしません）。
- 札に先に手を触れた方が、その札を取ることができます。
* 全く同時の場合は、その札を持ち札としている方の取りとします。
- 読まれた札が無い陣地の札に触れると、お手つきとなります。
* 源平戦の場合、1首につき、1チームで何人がお手つきをしても、
1つのお手つきと数えます。



- 〔送り札〕相手の持ち札を取ったときと、相手がお手つきをしたときに、
相手に自分の持ち札を1枚送る（渡す）ことができます。

どの札を送るかは、送る方の自由です。札を送る時は、札を相手の方に向けて、相手陣の空いているところに丁寧に送ります。
送られた札をどこに置くかは、送られた方の自由ですので、この場合は、札が置かれた場所から、自陣の好きなところに並べ直してかまいません。

3 試合終了

どちらかの持ち札がなくなったら、試合は終了です（持ち札がなくなった方が勝ちです）。

- お互いに、そして審判員と読み手にも「ありがとうございました」と一礼をした後、協力して、札の枚数確認（50枚あるかどうか）と整理をします。
個人戦の場合は、各自で、対戦結果カードに勝敗と枚数差を記入します。
（源平戦では、担当の審判員に記入してもらいます）

〔対戦結果カードの記入のしかた〕

源平戦		小学校			
	場 所	対 戦 相 手	勝 敗 (○・×)	枚 数 差	
一回戦		小		枚	
二回戦		小		枚	
三回戦		小		枚	

- 学校名 ... すでに記載されています。
 - 場所 ... 受付・集計係で記入します。
 - 対戦相手 ... 所定の場所に着いたら確認し、記入します。
(源平戦の場合は、担当の審判員が記入します)
 - 勝敗 ... 勝ったら、負けたら×を記入します。
 - 枚数差 ... その場に残った札の枚数を記入します。
(勝っても負けても、対戦相手と同じ数字が入ります)
- 自分が何枚取ったかではないので注意！

第12回「あだち子ども百人一首大会」は、令和3年3月6日（土）に、足立区総合スポーツセンターにて開催する予定です。
詳しいことは、後日、学校を通じてお知らせします。

足立区教育委員会 青少年課 青少年事業係

令和2年4月 〒120-8510 足立区中央本町1-17-1
TEL 03(3880)5275(直通)



小倉百人一首に挑戦!

強くなるコツは 感性・集中力・体力!

「あだち子ども百人一首大会」

試合の仕方

- ア) 源平戦... 1チーム3人で相手チームと対戦します。
- イ) 個人戦... 1対1で対戦します。
各々の持ち札25枚が、早くなくなった方が勝ちです。

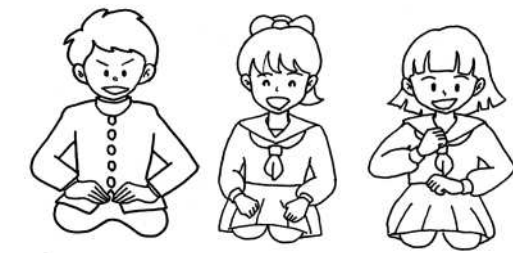


1 札をならべる

- (1) 50枚の札を裏返した状態で混ぜ合わせ、
25枚ずつ取ります。

(5枚の山を作りながら行くと、札数が数えやすく作業がスムーズです)

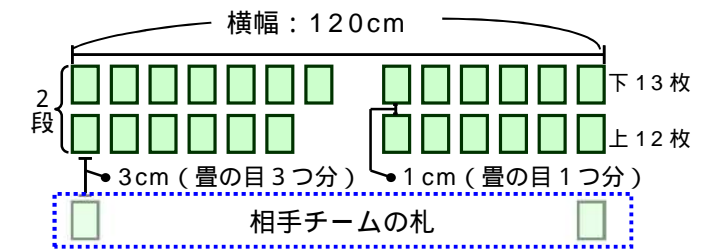
- (2) 競技場内に貼ってあるラインテープの幅の範囲内に、札を並べます。



源平戦

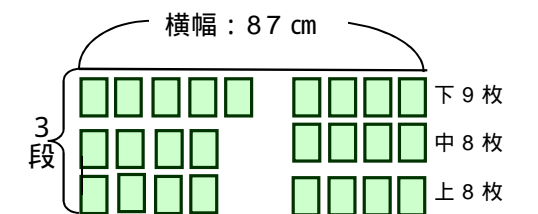
- 源平戦 120cmの幅の中に、上段12枚、
下段13枚の2段に並べます。

- 個人戦 87cmの幅の中に、上段8枚、
中段8枚、下段9枚の3段に
並べます。

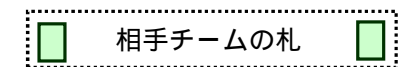


- (3) 対戦相手の札との間隔は3cm（畳の目3つ分）
上（中）下段の間隔を1cm（畳の目1つ分）にします。
- (4) 札を並べる時間を含み、3～5分の暗記時間を取ります
（おおよその選手が並べ終わった時点で「〇時〇〇分から始めます」とコールします）。
- (5) 対戦中は、札の並び順を変えることはできません。
また、札を取ったり取られたりして札と札の間が空いてもそのまま続けます。ただし、札の向きが乱れた場合は、
まっすぐに直して整えることはできます（ ）。
対戦相手（と審判員）に「札を整理します」と伝えてから整理します。

個人戦



- ！ 個人戦では、対戦ごとに一人ずつの審判員はいません。
(数人が、全体を見渡す形で点在しています)



小倉百人一首

おへらひやくにたいしゅう

年組名前

1 秋の田のかりほの庵の苫をあらみ 我が衣手は露にぬれつつ
2 春すぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山
3 あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む
4 田子の浦にうち出でてみれば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ
5 奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の 声聞くとときぞ秋はかなしき
6 かささぎの渡せる橋におく霜の 白きを見れば夜ぞ更けにける
7 天の原ふりさけ見れば春日なる 三笠の山に出でし月かも
8 我が庵は都のたつみしかぞ住む 世をうち山と人はいふなり
9 花の色はうつりにけりないたづらに 我が身世にふるながめせし間に
10 これやこの行くも帰るも別れては 知るも知らぬも逢坂の関
11 わたの原八十島かけてこぎ出でぬと 人には告げよあまのつり舟
12 天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ をとめの姿しばしととめむ
13 筑波嶺の峰より落つるみな川 恋ぞつもりて淵となりぬる
14 陸奥のしのぶもぢずりたれゆゑに 乱れそめにし我ならなくに
15 君がため春の野に出でて若菜つむ 我が衣手に雪は降りつつ
16 立ち別れいなばの山の峰に生ふる まつとし聞かば今帰り来む
17 ちはやぶる神代も聞かず竜田川 からくれなゐに水くくるとは
18 住の江の岸に寄る波夜さへや 夢の通ひ路人目よくらむ
19 難波潟短き背のふしの間も あはてこの世をすくしてよとせ
20 わびぬれば今はたおなじ難波なる みをつくしても逢はむとぞ思ふ
21 今来むといひしばかりに長月の 有明の月を待ち出でつるかな
22 吹くからに秋の草木のしをるれば むべ山風を嵐といふらむ
23 月見ればちぎに物こそかなしけれ 我が身ひとつの秋にはあらねど
24 このたびはぬさもとりあへず手向山 紅葉の錦神のまにまに
25 名にし負はば逢坂山のさねかつら 人に知られてくるよしもがな

Table with 26 empty cells for name entry.

26 小倉山峰の紅葉葉心あらば 今ひとたびのみゆき待たなむ
27 みかの原わきて流るるいづみ川 いつ見きてか恋しかるらむ
28 山里は冬ぞさびしきさまさりける 人めも草もかれぬと思へば
29 心あてに折らばや折らむ初霜の おきまどはせる白菊の花
30 有明のつれなく見えし別れより あかつきばかり憂きものはなし
31 朝ほらけ有明の月と見るまでに 吉野の里に降れる白雪
32 山川に風のかけたるしがらみは 流れもあへぬ紅葉なりけり
33 久方の光のどけき春の日に しづ心なく花の散るらむ
34 たれをかも知る人にせむ高砂の 松もむかしの友ならなくに
35 人はいさ心も知らずふるさとを 花ぞむかしの香にほひける
36 夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを 雲のいつこに月宿らむ
37 白露に風の吹きしく秋の野は つらぬきとめぬ玉ぞ散りける
38 忘らるる身をば思はずちかひてし 人の命の惜しくもあるかな
39 あさぢふのをのの篠原しのぶれど あまりてなどが人の恋しき
40 しのぶれど色に出でにけり我が恋は 物や思ふと人の問ふまで
41 恋すてふ我が名はまだき立ちにけり 人知れずこそ思ひそめしか
42 契りきななたみに袖をしぼりつつ 末の松山波こそじとは
43 あひみての後の心にくらぶれば むかしは物を思はずりけり
44 あふことの絶へてしなくはなかなか 人をも身をも恨みざらまし
45 あはれともいふべき人は思ほえて 身のいたづらになりぬべきかな
46 由良の門を渡る舟人かぢをたえ ゆくへも知らぬ恋の道かな
47 八重葎しげれる宿のさびしきに 人こそ見えね秋は来にけり
48 風をいたみ岩つつ波のおのれのみ くだけて物を思ふ頃かな
49 みかき守衛士のたく火の夜はもえ 昼は消えつつ物をこそ思へ
50 君がため惜しからざりし命さへ 長くもがなと思ひけるかな

Table with 26 empty cells for name entry.

51 かくとだにえやはいぶきのさしも草 さしも知らじなもゆる思ひを
52 明けぬれば暮るものとは知りながら なほ恨めしき朝ほらけかな
53 嘆きつつひとり寝る夜の明くる間は いかにかに久しき物とかは知る
54 忘れじの行く末まではかたければ 今日を限りの命ともがな
55 滝の音は絶えて久しくなりぬれど 名こそ流れてなほ聞こえけれ
56 あらざらむこの世のほかの思ひ出に 今ひとたびのあふこともがな
57 めぐりあひて見しやそれともわかぬ間に 雲がくれにし夜半の月かな
58 有馬山猪名の笹原風吹けば いでそよ人を忘れやはする
59 やすらはで寝なましものを小夜更けて かたぶくまでの月を見しかな
60 大江山いく野の道の遠ければ まだふみも見ず天の橋立
61 いにしへの奈良の都の八重桜 今日九重にほひぬるかな
62 夜をこめてとりの空音ははかるとも よに逢坂の関はゆるさじ
63 今はただ思ひ絶えなむとばかりを 人づつならでいふよしもがな
64 朝ほらけ宇治の川霧絶えだえに あらはれわたる瀬々の網代木
65 恨みわびほさぬ袖だにあるものを 恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ
66 もろともにあはれと思へ山桜 花よりほかに知る人もなし
67 春の夜の夢ばかりなる手枕に かひなく立たむ名こそ惜しけれ
68 心にもあついでつき世にながらへば 恋しがるべき夜半の月かな
69 嵐吹く三室の山の紅葉葉は 竜田の川の錦なりけり
70 さびしさに宿を立ち出でてながむれば いつこもおなじ秋の夕暮れ
71 夕されば門田の稲葉おとつれて 芦のまろやに秋風ぞ吹く
72 音に聞く高師の浜のあだ波は かけじや袖のぬれもこそすれ
73 高砂の尾の上の桜咲きにけり 外山のかすみ立たずもあらなむ
74 うかりける人を初瀬の山おろし はげしかれとは祈らぬものを
75 契りおきさせもが露を命にて あはれ今年の秋もいぬめり

Table with 26 empty cells for name entry.

76 わたの原こぎ出でて見れば久方の 雲ゑにまがふ沖つ白波
77 瀬を早み岩にせかるる滝川の われても末にあはむとぞ思ふ
78 淡路島通ふ千鳥の鳴く声に 幾夜寝さめぬ須磨の関守
79 秋風にたなびく雲の絶え間より もれ出づる月の影のさやけさ
80 長からむ心も知らず黒髪を 乱れて今朝は物をこそ思へ
81 ほとぎす鳴きつる方をながむれば ただ有明の月ぞ残れる
82 思ひわびさても命はあるものを 憂きにたへぬは涙なりけり
83 世の中よ道こそなけれ思ひ入る 山の奥にも鹿ぞ鳴くなる
84 ながらへばまたこの頃やしのはれむ 憂しとみし世ぞ今は恋しき
85 夜もすがら物思ふ頃は明けやらで 閨のひまさへつれなかりけり
86 嘆けとて月やは物を思はする かこち顔なる我が涙かな
87 村雨の露もまだひぬまきの葉に 霧立ちのぼる秋の夕暮れ
88 難波江の岸のかり寝のひと夜ゆゑ みをつくしてや恋ひわたるべき
89 玉の緒よ絶えなば絶えながらへばし のぶることのよわりもぞする
90 見せばやな雄鳥のあまの袖だにも ぬれにぞぬれし色はかはらず
91 きりぎりす鳴くや霜夜のさむしさに 衣かたしきひとりかも寝む
92 我が袖は潮干に見えぬ沖の石の 人こそ知らねかはく間もなし
93 世の中は常にもがもな渚こく あまの小舟の綱手かなしきも
94 み吉野の山の秋風小夜更けて ふるさと寒く衣つつなり
95 おほけなくつき世の民におほふかな わが立つ袖に墨染の袖
96 花さそふ嵐の庭の雪ならいで ふりゆくものは我が身なりけり
97 来ぬ人をまつ帆の浦の夕なぎに やくや藻塩の身もこがれつつ
98 風そよぶならの小川の夕暮れは みそぎぞ夏のしるしなりける
99 人も惜し人も恨めし味気なく 世を思ふゆゑにもの思ふ身は
100 ももしきや古き軒端のしのぶにも なほあまりあるむかしなりけり

Table with 26 empty cells for name entry.